



Title	神から人への石見神楽：機能と伝承の変化の分析
Author(s)	Lancashire, Terence Alan
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39706
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	ランカシャー テレンス アラン Lancashire Terence Alan
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 2 3 0 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 8 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科芸術学専攻
学 位 論 文 名	神から人への石見神楽 ー機能と伝承の変化の分析ー
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 山 口 修 (副査) 教 授 神 林 恒 道 助教授 渡 辺 裕

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、島根県に伝承されている芸能の一つである石見神楽を対象とし、主として音楽と詞章の伝承過程に焦点をあてながら、様式と機能の変化を論じている。神楽は本来、その上演を通じて「神を迎え、神を楽しませる」という儀礼的な意味を担っていたと考えられる。ところが、近現代の社会的変遷と歩調を合わせて、次第に「人のために演じられる」という娯乐的、芸術的性格を強めていった。こうした経緯を跡づけるために、古文書から現代の学術論文に至るまでの文献類を詳細に吟味するだけでなく、口伝情報や現在の上演状況を実地に記録し分析するフィールドワークをも積み重ね、その結果、独自の伝承論を構築するに至っている。

本論は大きく三部からなる。本論に先立つ序論において研究の背景および論文の目的と構成が述べられた後、四章からなる第一部「石見神楽の概略」で研究対象としての石見神楽を背景、起源、歴史、上演者、演目という観点から概略し、二章からなる第二部「石見神楽の伝承から生じる変化」で音楽と詞章を通時的かつ共時的に分析した上で、二章からなる第三部「神から人への石見神楽」では、機能の変化が現代的な生産性をどのように導きだしたかが論じられている。

序論ではまず、外国人が日本の民俗芸能を担う人びとのインサイダーとして受け入れられるようになるまでの経緯が述べられ、その体験から、石見神楽のあり方が儀式性と芸能性という二極間の移動として捉えられることが述べられる。

本論でのより詳細な問題意識は、第一部で一般的な見解や先行研究の問題点を検討しながら石見神楽を概略する過程で次第に明らかになる。

第一章「石見神楽の背景」では、中国地方に分布する隠岐神楽、出雲神楽、備中神楽、備後神楽、安芸神楽、周防神楽、長門神楽といった一連の地名を冠する神楽の名称が必ずしも学問的な裏付けによる系統分類ではないことがまず指摘される。このことを証明する手順として、「言葉としての神楽」「活動としての神楽」「神楽としての演劇演目」と題する三つの節が設けられ、神楽という言葉が歴史的にさまざまに用いられてきたことが示される。それらに共通する意味あいとしては、単に神社でおこなう何らかのかたちでの音楽、舞踊、演劇といったことしかなく、神社でおこなわれる「神楽」「神能」「能舞」「舞」などを包括して今日この言葉が使われるところに混乱の原因があると指摘する。

第二章「石見神楽の起源と歴史」では、こうした問題点をさらに具体的に検討した上で、石見神楽の歴史を論じる

際にもっと重要な意味をもつ「六調子神楽」と「八調子神楽」の起源と伝播の問題が提示される。まず起源については、さまざまな台本の存在や保存されている仮面を検討した結果、石見神楽が少なくとも16世紀までは遡ることができるという。通説としては、出雲神楽と関係が深く、とくに松江市の近辺にある佐陀神社の神能が石見神楽など他の神楽に影響を及ぼしたとされ、本田安次が提示する神楽分類での出雲系神楽という用語もそこに由来する。佐陀神能の起源もはっきりしていないが、1608（慶長13）年に佐陀神社の神官の一人が京都で習い覚えた能の要素を取り入れて佐陀神能を創始し、その時以来、佐陀神能の影響が周辺に及んだといわれている。しかし、佐陀以外の出雲神楽や石見神楽の演目を構成や音楽の面から検討すると、佐陀神能の影響はほとんど認められない。その意味でも、出雲系神楽という用語の概念は、その是非が問われるべきである。

石見神楽の起源については、データがきわめて限られているため結局推定の域を越えないが、佐陀神能が創始される前から存在していたと思われる。しかし、文献資料が続出する19世紀以降は、石見神楽の歴史をたどることができる。すなわち、大筋としては、後世に「六調子石見神楽」と呼ばれるようになった形態が主であったのに、明治以降には「八調子石見神楽」と呼ばれるものへと変化するという流れがあったのである。この事実は、さまざまな台本を照合して演目の配列を詳細に吟味することによって裏付けられる。

続く第三章では、上演者の歴史の変遷をたどる。大まかにいうと二種類、すなわち神職と民間人が区別できる。明治以前には神楽は神職によって演じられていたが、1870年に神職の演舞が政府によって禁止されてからは民間人にも上演されるようになった。その結果、石見神楽全体の伝承方法のみならず、構成や内容にも大きな変化が生じた。神職から神楽を伝授された民間人は神楽社中を組織し、音楽と詞章はさまざまに改訂されることになった。「芸能化」がこの時から明白に始まった。民間人とは主に農業に従事する人びとであり、当時「百姓神楽」とさえ呼ばれていたほどであった。近年では、農業人口が減少するにつれ、異なる職業をもつ担い手が増加している。とくに肉体労働者が目立っており、東京や大阪などの大都市の大学で教育を受けた同じ年齢層の若者が神楽にあまり関心を示さないこともあわせて指摘される。

第四章では、演目の概要が提供される。篠原實の『校訂石見神楽台本』（1972）を中心にして検討した結果、際だっている特徴の一つは『古事記』や『日本書紀』に含まれるエピソードに基づく演目が多いということであることが判明する。これは、17～18世紀の当地での国学者の活動や彼らの復古思想を反映したものであると思われる。

ここまで提示された問題点を常に念頭におきながら詳細に音楽と詞章を分析するのが、この論文の主要部分を成す第二部である。益田市およびその近辺で実施したフィールドワークの成果を念入りに活用している。

第五章「音楽」では、演劇的な四つの演目のうちから「真がた」と呼称される曲が分析対象の曲としてサンプリングされる。それは、神や他の重要人物の登場を伴奏するこの曲がもつ代表性に着目してのことである。楽譜を一切使わずに口頭的に伝承されるこの音楽をさまざまな演奏例に即して分析することにより、その伝承方法から生じ得る変化を解明することを目的としている。

浜田市の西部から益田市にかけて存在する多くの神楽社中のあいだで明治以降にいくつかの伝承経路があったことが知られている。佐々木栄左衛門なる人物は、19世紀末に作られた新しい「八調子」と呼ばれるスタイルの音楽や舞踊を、1900年ころから30年ほどのあいだに多くの社中に教えたという。そのために現在の多くの社中は同じように演奏しているのだと一般にいわれている。しかし実際には、綿密な分析から判明するように、伝承の経路によって細部では違いが生じている。具体的には、太鼓、笛、声をそれぞれ抽出して分析すると、その違いはより鮮明になる。太鼓の場合、八拍から成る定型のリズムパターンがそれぞれの社中にいくつかずつあり、パターンそのものは社中間で同一とみなし得るものであっても、現実の演奏に際してパターンを配列する方法、すなわちシンタックスを比べてみると違いがあるのである。歌の場合は変異性は比較的少ない。しかし、笛の旋律は太鼓以上にさまざまな配列を示す。それでも、ある旋律周期を開始するフレーズやそれを終止させるフレーズは明らかな共通性を示しており、石見神楽の伝統が典型的に現われている。

第六章「詞章」では、石見神楽の文芸的側面が扱われる。かつては詞章は口頭的に伝承されていたが、そこから生じたさまざまな誤りを訂正するために18世紀から20世紀にかけていくつかの神楽台本が作られた。それでも、識字率が高まった比較的新しい時代を除けば、詞章の伝承は本質的に口頭的であったと考えられる。そこで、他の文化を事例にしてアルバート・ロードやウォルター・ロングが口承文芸を論じたモデルに従って石見神楽の詞章が分析される。

結論としては、やはり口頭伝承的な特徴が「決まり文句」とそうでない語句のあいだの違いとして浮上してくる。しかし、台本自体にすでに語句の誤りが記されていることをも含めて、詞章の上での細部の違いは上演者だけでなく、もっと上のレベル、たとえば国学者らの活動からも生じたと考えられる。

こうしてある程度判明した石見神楽の様式的、構造的変化を社会変化というコンテキストに改めてもどして、この論文の主たる問題意識である機能の変化を論ずるのが第三部である。

第七章「機能と変化」では、石見神楽がその歴史において果してきた社会的機能を論ずる。「歴史から見た神楽の役割」「役割から見た演劇神楽と採り物舞の関係」「国学から見た演劇的な神楽」と題する三つの節で神社の儀式としての神楽が、次第に観客のための演劇へと変貌する過程が考察され、次の「演劇神楽の地位—神楽であるか」の節で再び神楽という言葉の多義的な使い方を論ずる。しかしここでは、用語というよりもむしろ、すでに「芸能化」の一途をたどりつつあった石見神楽の社会的存在理由を娯楽または芸術という方向で肯定的に認める論者の考え方へと論点が移動してゆく。「演劇神楽の芸能化」「機能の変化」の二つの節は、いまや神社を離れて、いわばショーとして百貨店のイベントや結婚式、さらに観光イベントに組み込まれることの方が多い石見神楽を、現代社会が求めるものと結論づけるための考察である。地元の歴史家や神楽専門家などからの批判があるとはいえ、上演者たちは音楽、衣装、大道具、小道具、照明、演出などを大胆に変えており、いつも優れた上演を目指しているのである。

第八章「結論」では、さらに明快に論者の見解が示される。現在の石見神楽がはたして昔からの伝統を代表するものであるか、あるいはもっと端的に言って神楽であるのか、という疑問は当然浮かび上がってくるにしても、本来の機能を否定した上で時代の変化に対応することによって、石見神楽は自然に生き残っており、しかも地元の多くの人びとによって高く評価されている。

論文審査の結果の要旨

日本の民俗芸能の研究は、従来は主として民俗学者が詞章、演目名、口伝情報などを書き留めたり、上演形態を記述し、さらに国内の類似例と照らし合わせて系統分類をおこなうたかちでなされてきた。これに加えて、それぞれの土地での郷土史家たちが身近なところにある情報を書き留めることもなされてきた。しかし、音楽学のおよび演劇学的な立場から徹底的に調査研究した例はきわめて少ない。音楽学的なサーヴェイ研究は、1960年代以降増加の傾向にはあるが、録音資料から採譜して音階、リズム、楽曲形式などの側面を抜き出して分析するといった作業に留まる傾向が顕著であったことは否めない。本研究においては、舞踊の所作を丹念に分析することこそなされてはいないが、それを除けばかなり広範囲の観点から総合的に民俗芸能の諸問題に迫っており、そのことがまず高く評価できる。しかも、歴史的および現代的な文献にあたる研究を、フィールドワークに基づく音楽様式研究や文化人類学的ないし社会学的な社会動態論と密接に関連づけており、問題提起からデータ分析を経て総合的解釈に至るまでの各段階で説得力のある論が展開されている。そして、最も高く評価できる事実としては、単なるモノグラフの記述に終始することなく、分析と解釈のテーマを明白に設定した上で、その課題を追究する「読ませる」文章を綴っていることである。

次に、民族音楽学あるいは文化人類学的な異文化研究という観点から本論文を評価するなら、研究対象との距離を適度に保ちつつ十分に当該文化のなかに身を置いた、いわゆる「参与観察」の手法が見事に適用されている。しかも、最近の民族音楽学で望ましいかたちの研究のあり方として主張されることの多い「音楽伝統を担う人びととの人間関係を重視した友好的な対話の状況」が調査した時の雰囲気として読み取れるのも優れた点として評価できる。

上記二点の研究上の特徴は、それらを強調しすぎた場合、ややもすると根拠の薄い軽薄なエッセイになってしまう恐れがあるのではあるが、この論文では、必要な時にはいつでもデータと分析結果を精密に整理して提示していて、論じられている内容を読者がある程度は確認できる体裁を保っている。とくにデータの羅列が冗長になって論文を読む上での流れが阻害される可能性がある場合には、データ類を巻末付録として提示している。音楽的なデータとしては、紙上に楽譜として提示され、記号を使った分析が本文の流れを阻害することなく適宜挿入されていて、論旨の有機的な一部分を成している。

欠点としては、第一にフィールドデータの生のかたちがどの程度読者の手の届くところに置かれているのかが判明

しないことが挙げられる。とくに録音録画資料は、その主要部分だけでも編集したかたちで添付資料として提示されていてしかるべきであった。もっとも、肖像権、音源権といった著作権に類する問題が将来浮上してくる可能性もあるので、微妙な問題を避けたのは賢明であったともいえる。しかし、少なくとも原資料やその複製が現地のしかるべき施設や自分の所属する大学の研究室に保管されて、一定の手続きをとれば読者が利用できるようにすることもできたであろう。こうした配慮がなされていれば、書かれた文や提示された楽譜、データの類を読者が直接確認できるようにすべきであるとする民族音楽学の新しい展開に添うことになったであろう。

第二に、民俗芸能の総合的な把握にとって重要な鍵を提供するはずの身体動作や舞踊の分析がまとまったかたちではなされていないことが惜しまれる。芸術表現における身体性を論ずることが脚光を浴びつつある現在、その反省に立った吟味が将来の課題として残されている。

こうした欠点はしかし、本論文全体の価値を大きく損なうものではない。これを出発点として、若干の修正を加えつつ、さらに高次の総合的研究がなされることが期待される。先行研究を吟味した上で独自の理論と方法を明瞭に展開した本論文は、日本の民俗芸能の研究史、そして音楽学全体のなかで重要な位置を占めることになるであろう。本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位請求論文として十分に価値のあることを認定するものである。